

## バーンアウト研究への現象学的アプローチの導入について

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助領域  
人間形成・臨床教育クラスター  
齊藤 由香

バーンアウトは燃え尽きていくプロセスであって一瞬にして全てが経験されるような現象ではない。バーンアウトする援助者たちは長い時間、被援助者や職場関係者たちなどのかかわりあいのなかで意識としてとらえられる経験として、あるいは意識となって立ち現れる以前の経験としてバーンアウトのプロセスを生きている。

このように援助者により生きられている「経験」は、意味をもった一つの現象として我われの「世界」に立ち現われてくるのであるが、その現象をそれが現われてくる世界の内側から考察すること、すなわち社会や現象を客体化して考察するのではなく、それらをそもそも成立せしめている援助者の体験世界そのもののなかから、現象それ自体が我われに語りかけてくる言葉を聴こうとすることを現象学という方法論をもって試みたのが本論である。

「はじめに」の章では、研究方法として現象学を取り上げた背景について述べている。

「第一章」では、学問的研究が言葉に依拠しているというその性質上、その基盤を揺るぎないものにしてゆくためには、まずは基本概念の言葉を一義的に定義する必要があるという点から考察をすすめている。そのためには、まずは基本的概念として使用される言葉について、その経験まで遡ってその意味を確認し統一的した意味を付与してゆくという作業が必要となるのだが、これが現象学的な言葉の反省とされるものである。

「第二章」は、バーンアウトを「経験」するとはどういうことか、そしてその「経験」が「意識化」されるとはどういうことなのかについて考察する。

「第三章」は西村の現象学的記述を中心に、その記述から二通りの「見えてくるもの」について述べる。一つは記述内容そのものから「見えてくる」ものについて、もうひとつは対話により引き出された記述のスタイルから「見えてくるもの」についてである。

「結び」の章では第三章の後半部を引き継ぎ、対話を中心に、それが「個人の経験」という閉じた世界を他者に開かせる方法であるということについて論を展開してゆく。

以上が本論の要旨である。しかしながら「結び」の最後で述べるように、現象学は常に動的なものであり、あらかじめ我われに与えられているような普遍的な真理を追究するものではない。したがって本論も、バーンアウトという現象が我われに何を伝えようとしているのかを、常にその時代のなかで、我われによって生きられている「経験世界」のなかから不断に問いつづけてゆく、我われの自覚的なまなざしの喚起を意味するものであり、我われの経験が我われに語りかける言葉を聴くための一つの方法論の提示である。